

令和元年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

中学生ワークショップ

I. 事業要旨

このプログラムは、北九州市発達障害者支援センターに継続相談をしている中学生の相談者の中で、環境変化に慣れるまでに時間を要したり、思春期を迎えて他者との違いを意識し始め、多様化・複雑化する人間関係に悩んでいる方を対象に、学校外の小集団での活動を通して、自分の思いや悩みを誰かと共有したり、安心して他者と関わることのできる「居場所作り」を行うことで、不安の軽減や社会参加への意欲に繋げることを目的としている。

一昨年度より開始しているプログラムであるが、今年度は、コロナウイルス対策によって5回目の活動が中止となった為、計4回の活動を実施した。参加者は、中学1年生が2名、3年生が2名の計4名であった。活動の導入時には、アイスブレイクを実施し、参加者が無理なく参加できるよう配慮した。その後、Wii Uやゲーム活動を行った。また、今年度は、参加者の希望を取り入れ、調理活動や制作活動に加えて、簡単なスポーツ活動を行うようにスケジュールを組み立てた。全ての活動を通して、参加者が見通しを持って活動に参加しやすいように、毎回のスケジュールの流れは大きく変えずに実施した。

効果検証に関しては、プログラム開始前と終了後に、中学生ソーシャルスキル尺度と中学生用ストレス反応尺度の自己評価を行い、参加者の変化の測定を行った。また、毎回の活動ごとの参加者の様子を記録し、活動中の変化を見た。また、プログラム終了後に、参加者全員に対し、アンケート調査を実施し、ワークショップの感想や要望を聞き取った。保護者に対しては、2回目の活動終了後に、中間インタビュー調査、活動終了後に、アンケート調査を実施して、家庭や学校での参加者の変化を聞き取った。

中学生ソーシャルスキル尺度については、【配慮】では2名の参加者が、【主張】では3名の参加者が初期チェックよりも最終チェックの点数が上がっていた。中学生用ストレス反応尺度については、1名の参加者が最終チェックの点数が上がっていたが、学校や家庭での出来事が、点数の変動に影響していることが考えられる。

今年度は、参加人数が少ない活動が多かったが、参加者全員が、率先して準備を手伝ったり、お互いに配慮し合いながら交流を深める様子が多く見られた。継続参加している2名の参加者は、活動を通して、学校生活での経験や悩み、自分なりに工夫している対応を話すことが増え、自信を持って他者とコミュニケーションできるようになっていた。ワークショップが、参加者にとって、悩みや思いをメンバーや職員と共有・共感したり、自分の考えを発信する場として、有効な

活動になっていると感じた。

今後も、個別の関わりや具体的な声かけ等、参加者の状態に応じた対応の工夫が必要である。プログラム実施後のアンケート調査や保護者へのインタビュー調査からは、参加者の活動への満足度は概ね高く、継続参加を希望している方もいた。「ゲーム中に声や身振りが大きくなるので、相手から引かれる」、「学校で周囲の女子生徒と話が合わない」と自身の課題や悩みを話す参加者もあり、ワークショップが参加者にとって、「仲間と楽しく過ごせる場所」以外にも、コミュニケーションや自己理解、他者視点の理解に繋がることのできる場になったと考える。

保護者へのアンケート調査の結果からは、ワークショップへの参加が本人にとって何らかの有効性があったと感じている保護者が25%いた。保護者からも活動の継続参加を希望する意見があり、居場所支援以外にも自己理解、他者視点の理解に繋がることのできる場としての期待が高かった。今後も、保護者の希望も聞き取りながら、参加者が楽しみながら意欲的に参加できるようなプログラムを実施していきたい。

Ⅱ．事業目的

中学生は、生徒数の拡大や教科担任制への移行、部活動の開始など、様々な環境変化を経験する時期である。北九州市発達障害者支援センターの中学生の相談者の中には、そのような環境変化に戸惑い、ストレスを抱えたり、学校環境に慣れるまでに時間を要する方がいる。また、思春期を迎えて、他者との違いを意識し始めたり、多様化・複雑化する人間関係に悩んでいる方も少なくない。そこで、本プログラムでは、学校外の小集団での活動を通して、自分の思いや悩みを誰かと共有したり、安心して他者と関わることのできる「居場所作り」を行うことで、不安の軽減や社会参加への意欲に繋げることを目的とする。

Ⅲ．事業の実施内容

ワークショップは、長期休暇中の午後2時から3時30分までの時間帯に活動を実施した。参加者は、公立中学校情緒学級在籍の方が2名、公立中学校通常学級在籍の方が2名の計4名であった。活動の進行については、北九州市発達障害者支援センターの職員が行った。参加者が見通しを持って安心して参加できるように、毎回の流れは大きく変えないよう配慮した。今年度は、参加者の希望を元に、調理活動や制作活動に加えて、簡単なスポーツ活動も取り入れてスケジュールを組み立てた。

活動内容の詳細と参加人数を、表1に示す。

表1 活動内容と参加人数について

日程	活動の内容	参加人数
7月 30日(火)	アイスブレイク・ゲーム (Wii U)・茶話会	1年生：1人 3年生：2人
8月 23日(金)	ピザ作り・茶話会	1年生：1人 3年生：1人
12月 24日(火)	アイスブレイク・キーホルダー作り・茶話会	3年生：1人
1月 6日(月)	書初め・ゲーム (Wii U)・茶話会	3年生：1人
3月 26日(木)	中止	

効果検証に関しては、プログラム実施前と終了後に中学生ソーシャルスキル尺度（資料3-2）と中学生用ストレス反応尺度（資料3-3）を参加者につけてもらい、参加者の変化を測定した。また、毎回の活動ごとに参加者の様子を記録し、状態の変化を見た。プログラム終了後には、参加者にアンケート調査（資料3-4）を行った。保護者に対しては、2回目の活動終了後に中間経過のインタビュー調査（資料3-5）及び、プログラム終了後にアンケート調査（資料3-6）を実施し、家庭や学校での参加者の様子の変化を聞き取った。

IV. 分析

1. 調査結果

① 中学生ソーシャルスキル尺度

中学生ワークショップ参加者に対して、プログラム開始前と終了後に中学生ソーシャルスキル尺度の自己評価を実施した。

自己評価の結果を、図1、図2に示す。

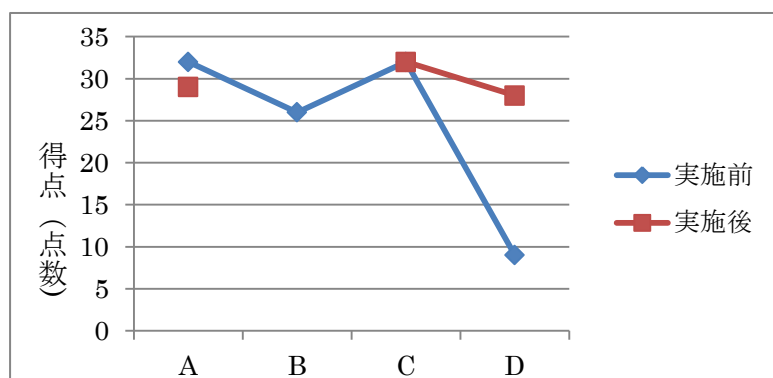


図1 中学生ソーシャルスキル尺度：自己評価得点【配慮】

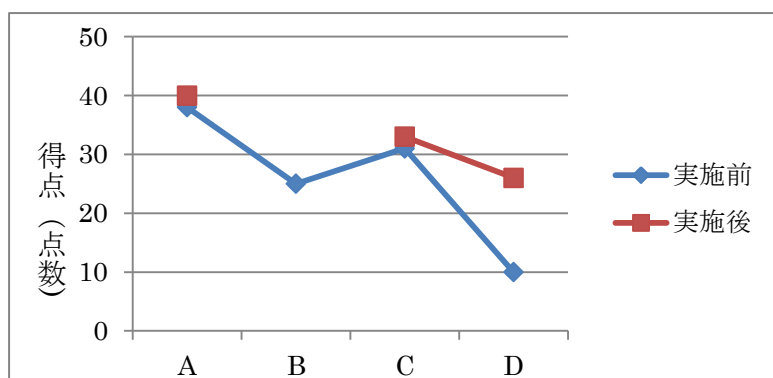


図2 中学生ソーシャルスキル尺度：自己評価得点【主張】

中学生ソーシャルスキル尺度は、各項目を5段階評定で点数化し、「あてはまらない」で1点、「あまりあてはまらない」で2点、「どちらともいえない」で3点、「ややあてはまる」で4点、「あてはまる」で5点とし、自己評価を行った。図1は【配慮】、図2は【主張】の合計得点の変化を示す。

プログラム終了後の最終評価が実施できていない1名を除いた3名の変化を見る。中学生ソーシャルスキル尺度の自己評価は、領域や項目によって点数が異なったが、【配慮】では、最終評価が実施できた参加者3名全員が、「クラスの人と一緒にいるときは、相手の気持ちを考えます」の項目の点数が上がっていた。また、「友だちが元気なときは、励まします」、「話をするときには、相手の気持ちを考えます」の項目の点数が上がっている参加者が2名いた。最終評価が上がっていた参加者は2名で、もう1名の参加者は変化がなかった。

【主張】では、「友だちに、自分の考えを言えます」、「人の意見に左右されないで、自分の考えを言えます」の項目の点数が上がっている参加者が2名いた。最終評価が実施できた参加者3名全員の最終評価が、上がっていた。

② 中学生用ストレス反応尺度

中学生ワークショップ参加者に対して、プログラム開始前と終了後に中学生用ストレス反応尺度の自己評価を実施した。

自己評価の結果について、図3に示す。

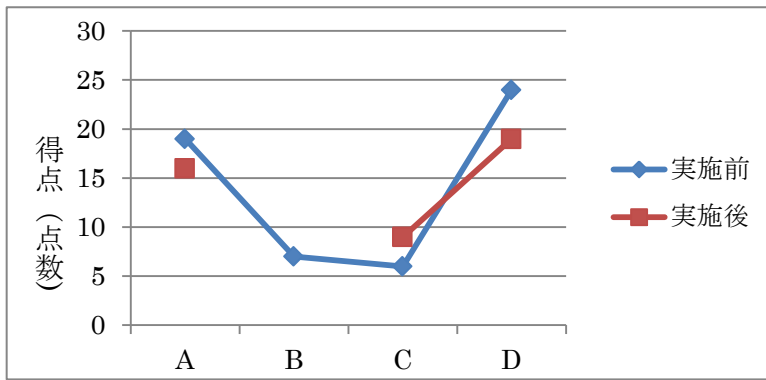


図3 中学生用ストレス反応尺度：自己評価得点

中学生用ストレス反応尺度は、各項目「0～20%達成」で0点、「21～50%達成」で1点、「51～80%達成」で2点、「81～100%達成」で3点とし、自己評価を行った。

中学生用ストレス反応尺度においても、最終評価が実施できていない1名を除いた3名の変化を見る。チェック項目は、個人によって異なり、自己評価の差が見られた。最終評価では1名の参加者が、合計点数が上がっていた。点数の上昇した1名に関しては、本人より、「小学校の時からずっと一緒のクラスで仲の良かった友だちが引っ越してしまっていて、悲しい」との話があり、学校での人間関係の変化が影響しているのではないかと考えられる。

③ ワークショップ活動参加時の様子の変化

表2は、ワークショップ参加者の活動記録から、個人の特記事項をまとめたものである。

表2 ワークショップ参加者の活動記録

A	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介やゲーム活動では、率先して取り組み、趣味の話題が出ると、自らメンバーに話しかけたり、積極的にコミュニケーションを取る。 ・メンバーとの話し合いの中で、メンバーの話に「それ良いよね」と同調したり、自分と違う意見が挙がっても、否定せずに受け入れる。 ・WiiUでは、「ゲーム中に声や身振りが大きくなるので、相手から引かれる」と自分の課題を発言する。ゲーム開始前に、振る舞い方を確認すると、対戦中は、言動を調整しながら取り組むことができる。 ・調理活動では、道具の使用の仕方を確認して取り組み始めるが、包丁を扱う際に、自己流で切ろうとするため、具体的な指示が必要となる。 ・制作活動では、事前に終了時刻を示しておく、時間を意識して作業する。 ・スポーツ活動では、「苦手」と言いながら、チャレンジする様子が見られる。繰り返し経験する内に、力加減して打ち返すことができるようになる。 ・茶話会では、学校で周囲の女子生徒と話が合わないこと等の悩みをスタッフに話す。 ・活動を通して、繰り返し経験したり、スタッフの実演を見的过程中で、やり方を習得したり、
---	--

	自分なりに工夫しながら取り組む様子が見られる。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・活動開始時に、「初めての人は無理だけど、慣れた人には自分から話しかける」と自分の目標を発表する。 ・ゲーム活動では、年下の初参加メンバーに話しかけたり、メンバーに見えやすいように道具の向きを変える等、相手を気遣う。 ・WiiUでは、メンバーやスタッフに、機器操作の仕方を教える。 ・活動を通して、メンバーやスタッフに、趣味や普段の生活の中での経験等、自分のことについて話すことが多い。
C	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介では、少し緊張した様子だが、スタッフやメンバーの意見を聞いて驚いたり、スタッフの質問や促しに応じて、自分の意見を発表する。 ・ゲーム活動では、メンバーやスタッフの取り組む様子を見て笑ったり、楽しむ。 ・WiiUでは、メンバーと話しながらゲームを進める。年上のメンバーとも楽しそうに会話する。 ・茶話会では、メンバーが「友人に貸した物が返ってこない」と発言すると、「親に連絡してもらえば良いと思う」と意見を言う。
D	<ul style="list-style-type: none"> ・活動開始前に、「ワークショップに参加する時間も、ゲームができればレベルアップするのに」とスタッフに言う。 ・調理活動では、スタッフの指示に応じながら、取り組む。作業中は、終始、ふざけたり、踊ったり、おどける様子が多く見られるが、道具の使用の際は相手の許可を取ったり、終了まで自分の作業を遂行できる。母親の様子を見て知っているとのことで、包丁の扱い方は上手い。 ・スタッフやメンバーの発言に対しては、「今何て言いました？」と聞き返したり、冗談や皮肉で返答することが多い。

個人によって内容は異なるが、活動を経験する中で、コミュニケーション面や自己理解、他者理解の面で変化が見られた参加者がいる。

ゲーム活動やWiiUの活動では、参加者全員が、自らゲーム機器の設定を手伝ったり、お互いに譲り合い、協力し合いながら活動を進めていた。メンバーの意見に同調したり、相手の考えが自分の意見とは違っても、「ためになりました」と受け入れていた。

調理活動では、役割分担をして作業した。職員のモデル実演や手順書を頼りに作業していた。自己流で道具を扱おうとしたり、作業を終えるまでに少し時間がかかる方もいたが、参加者全員が、職員の指示に応じながら、時間内に仕上げることを意識しながら、終了まで自身の作業を遂行することができた。

工作では、昨年度までは、自文のやり方にこだわり、時間内に作業を終えることができなかった参加者がいた為、事前に作業手順と具体的なスケジュールおよび、終了時刻を予告した。思い通りに作業ができなくても、「まあ良いか」と折り合い、終了時間を意識しながら、時間内に作業を終えること

ができた。

スポーツ活動では、運動が苦手な参加者が、自らチャンレジする様子が見られた。繰り返し行う内に、体の使い方や力加減が上手になり、楽しんで取り組んでいた。

昨年度から継続参加している2名の参加者に関しては、活動を通して、学校での経験や日常の悩みを話すようになった。特に、その内の1名の方は、「自分はみんなと違うタイプ」、「自分の言動が、引かれることがある」と自身の特徴を知り、学校や家庭でも、自分なりの工夫を実践していると発表していた。初参加の参加者も、メンバーの悩みを聞いて、助言をしたり、お互いに意見を言い合う等、参加者同士の交流が深まる様子が見られた。

活動に継続参加した1名には、コミュニケーション面や社会スキル面、自己理解等において、変化が見られたと感じるが、それ以外の3名の参加者は、参加回数が1回だった為、活動上での変化を追うことができなかった。活動に参加できなかった理由は様々であるが、家庭環境の変化や、部活動が多忙になり参加が難しかった等の意見が挙げられた。今後の活動においては、参加者の状態やメンバー構成に合わせて、活動時期や内容設定を検討していく必要があると考える。また、参加者の特性を考慮した具体的なスケジュール提示や約束の確認および、振り返りが効果的だったと感じる為、今後も、小集団の中でも、個別化された視覚支援や対応の工夫を継続する必要がある。

④ ワークショップ参加者へのアンケート調査

アンケート項目は、「1.ワークショップの活動には、また参加したいですか?」「2.ワークショップの活動に参加して、楽しかったことや役に立ったことはありましたか?」「3.ワークショップの活動に参加して、難しかったことや困ったことはありましたか?」「4.つばさのスタッフや他のメンバーとの交流はできましたか?」「5.ワークショップの活動に、希望することはありますか?」の5項目である。プログラム終了後の最終評価が実施できていない1名を除いた3名に対し実施した。

最終評価が実施できた参加者3名全員が、「ワークショップに参加して、楽しかったことや役に立ったことはあった」と答えていた。理由として「全ての活動が楽しかった」や、「周囲の人に対して壁を作る傾向があると指摘を受けたことがあるため、ワークショップでは、できるだけ親しみやすい雰囲気、自然体に振る舞うように心掛けた」という意見が挙げられた。また、1名の参加者が、「ワークショップに参加して、難しかったことや困ったことはあった」と答えており、理由として、「用事があって、なかなか参加ができなかった」という意見が挙げられた。

2名の参加者が、「メンバーや職員と交流できた」と感じていた。また、2名の参加者が、ワークショップの活動に「また参加したい」と答えており、それぞれ、「家でじっとするよりも、外へ出て活動したい」、「高校生ワーク

ショップがあれば参加したい」とのコメントがあった。1名の参加者は、ワークショップの活動に参加したいかどうか「よく分からない」と答えており、「参加したいが場所が遠い」との意見があった。今後は、「絵を描きたい」、「劇がしたい」などの活動要望が出ている。

⑤ 保護者インタビュー及びアンケート調査

ワークショップの2回目活動終了後に、対応可能な3名の保護者に対して、中間経過のインタビュー調査を実施し、家庭や学校での参加者の様子や変化点を聞き取った。変化点としては、「昼夜逆転していたが、少しずつ生活リズムが整ってきた」という生活面の変化や、「学校には行けていないが、通級指導教室と少年支援室には行けている」、「交流級に行くことができるようになって、明るくなった」といった意見が聞かれ、参加者が、自信をつけて新たなチャレンジをしていることが分かった。また、「気の合わない人との付き合い方も覚えたり、担任の先生の良い所を言うようになった」と、社会スキルの面での変化が見られる意見もあった。一方で、「反抗期も重なって、対応に苦慮している」、「学校には深い仲の友人がいないようだ。眠れないと言いつし、睡眠薬を服用するようになった」との意見もあり、思春期に入り、参加者が学校や家庭で新たなストレスや不安を抱えていることが考えられた。

ワークショップについては、3名の参加者が、「楽しかった」と家族に話していた。

ワークショップの全活動終了後には、保護者全員に対して、アンケート調査を実施した。アンケート回収数は3、アンケート回収率は75%であった。アンケートの結果について、表3、4と図4、5に示す。

表3 「お子様が、中学生ワークショップに参加することを希望した理由は何ですか（複数回答可）」について

① 学校以外で、同じ趣味や悩みを持つ同年代の仲間と、リラックスして関わる場所が欲しいから	1
② 学校以外で、コミュニケーションの練習ができる少人数での活動の場が必要だと思ったから	1
③ 活動を通して、社会マナーや適切な振る舞い方を覚えて欲しいから	0
④ 活動を通して、自分自身の考えを知ったり、色々な人がいることを知るきっかけにして欲しいから	1
⑤ 参加を勧められたから	0
⑥ その他	0

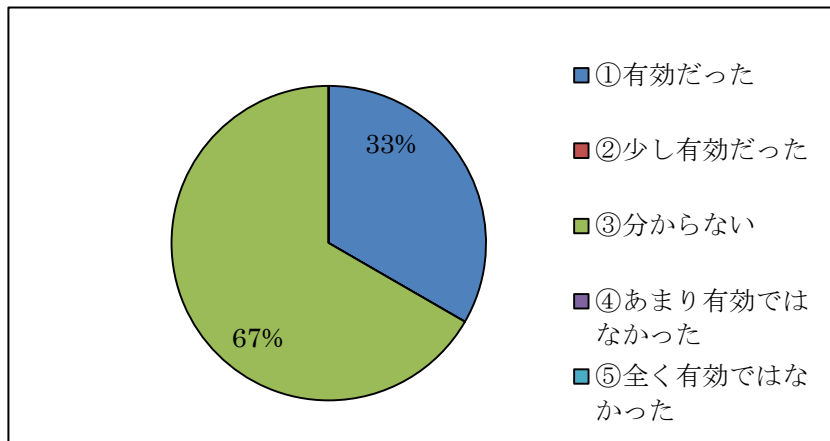


図4 「お子様が、中学生ワークショップの活動に参加することは有効でしたか」について

表4 「現在のお子様の生活で、どんなことが心配ですか（複数回答可）」について

① 学校での教師や友達との関わり方	1
② 異性との付き合い方	0
③ 家族との関係（家族と喋らない、兄弟との関わり方が心配 等）	0
④ 生活面での対応（時間の管理が苦手、忘れ物が多い、片づけが苦手 等）	1
⑤ 学習面についての心配（授業についていけない、ノートテイクができない、課題提出ができない 等）	2
⑥ 進路についての不安（受験に危機感がない、高校生活が心配 等）	2
⑦ その他	1

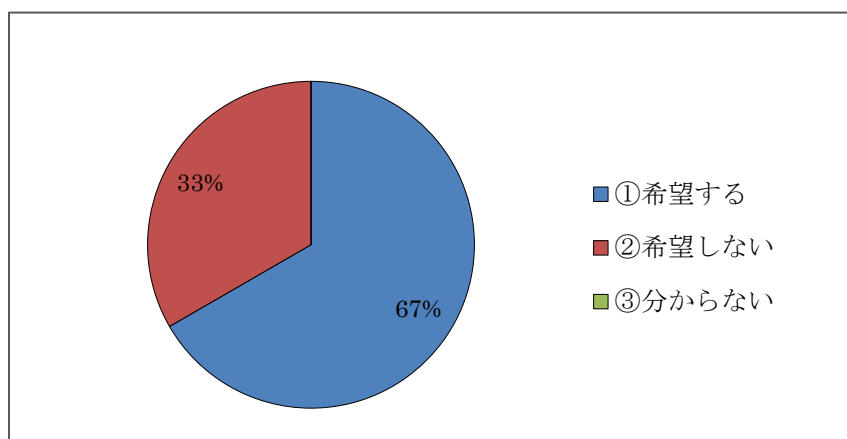


図5 「次年度も、お子様がワークショップに参加することを望まれますか」について

図4の「お子様が、中学生ワークショップの活動に参加することは有効でしたか」の主な内容を以下に示す。

- ・他者（特に同年代）との関わりが苦手だが、楽しく参加している様子が

あり、毎回必ず行きたいと積極的だった。

- ・楽しそうに参加していたが、一度きりの参加だったため、有効だったかどうかは分からない。

表4の「現在のお子様の生活で、どんなことが心配ですか（複数回答可）」の主な内容を以下に示す。

<①学校での教師や友達との関わり方>

- ・会話した内容を忘れていたり、勘違いをしたりしていることが多々ある。
- ・困っていること、不安なことを上手に伝えられない。

<④生活面での対応（時間の管理が苦手、忘れ物が多い、片づけが苦手 等）>

- ・反抗期も重なってか、親の言うことを聞かない。
- ・気分のムラが激しく、対応に困ることがある。
- ・整理整頓が苦手で、面倒くさがる。

<⑤学習面についての心配（授業についていけない、ノートテイクができない、課題提出ができない 等）>

- ・特定の教科が、全くついていけない。

<⑥進路についての不安（受験に危機感がない、高校生活が心配など）>

- ・ペースがゆっくりで、周りについていけないことがあるため、高校生活が心配。
- ・高校に入れるのか不安。

<⑦その他>

- ・社会に適応する能力がない訳ではないと思う。ゆっくり大人になればよいと思うため、特に心配はしていない。

表3の結果から、保護者はそれぞれ、「学校以外で、同じ趣味や悩みを持つ同年代の仲間と、リラックスして関わる場所が欲しいから」、「学校以外で、コミュニケーションの練習ができる少人数での活動の場が必要だと思ったから」、「活動を通して、自分自身の考えを知ったり、色々な人がいることを知るきっかけにして欲しいから」の項目にチェックをつけていた。保護者からは、「毎回楽しみにしており、大切な居場所になっている」、「同じような特性のある人と過ごしたのは初めてだったので、何かしら感じるがあったと思う」とのコメントもあり、ワークショップが、保護者にとって、「学校外の居場所」や「自己理解、他者視点の理解に繋がることのできる場」として期待が高いことが分かった。

図4の結果からは、33%がワークショップへの参加は「有効だった」、67%が「分からない」と回答している。「分からない」と答えた保護者からは、「楽しかったようだが、部活動があるため、継続が難しかった」、「あまり変化は感じないが、本人が楽しそうに参加していた」とのコメントがあった。

表4の結果から、「学習面についての心配（授業についていけない、ノートテイクができない課題提出ができない等）」、「進路についての不安（受験に危機感がない、高校生活が心配等）」の項目にチェックをつけている保護者が2名いた。保護者からは、現在の学習面や、進路に関しての不安が挙げられた。

図5の結果から、67%がワークショップへの継続参加を希望している。中には、次年度は高校進学する参加者の保護者もあり、「高校生ワークショップがあれば、本人も希望すると思う」とのコメントがあった。「希望しない」と答えたもう1名からは、「本人は部活動を理由に行けないと言っている」とコメントがあった。

2. 考察

中学生ワークショップは、一昨年度から開始し、3年目を迎えたプログラムである。今年度の参加者は、特別支援学級および、通常学級に在籍しており、その内の1名は、不登校で少年支援室を利用している方だった。全員が、何等かの特別支援教育の経験歴があったが、活動開始当初は、友人との関わり方や今後の進路についての不安を抱えており、自己評価の低い様子が見られた。

ワークショップの活動を通し、参加者の中には、自己理解や他者視点の理解に繋がったり、自身の対応を工夫するようになる等の変化が見られた方がいた。また、参加者全員が、楽しみながらメンバーと関わったり、積極的に声をかけ合う様子が多く見られた。

中間経過のインタビュー調査や活動終了後のアンケート調査からは、家庭や学校でも、新たな環境にチャレンジしたり、友人との関わり方を工夫するようになる等、対人対応やコミュニケーションスキルの面での変化が見られる方がいることが分かった。一方で、思春期に入り、保護者が対応に苦慮しているという意見も挙がった。

ワークショップについては、多くの参加者が、「また参加したい」と答えており、活動に関する要望も複数挙がっていた。学校や家庭で様々なストレスを抱えている参加者にとっては、少人数でのグループ活動は、自分らしく過ごすことができる中で、様々なスキルの練習や習得のできる場としても、有効な活動だったと考える。

今年度は、参加人数が少なく、変化を継続して追えなかった方が多かった。活動に参加できなかった理由は様々だったが、参加者の中には、小集団の活動でも、より個別な関わりや対応の工夫が必要な方がいた。今後も、参加者の状態に応じて、より具体的なスケジュール提示や約束の確認等、参加者が活動に参加しやすいような工夫を継続していくことが必要である。

保護者からも、ワークショップの継続参加を希望する声が複数挙がっている。居場所支援や学校外で他者とコミュニケーションを練習する場とし

ても、ワークショップへの期待は高かった。今後も、保護者の希望も考慮しながら、参加者が楽しく意欲的に参加できるような活動を実施していきたい。